

第6章 閉会の挨拶

笹川 孝一

(法政大学キャリアデザイン学部教授)

笹川 こんにちは、法政大学の笹川と申します。きょうは久しぶりに段木先生のお顔も拝見し、鷹野先生は高校の1年先輩でありまして。嬉しく思っています。皆さん、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。あらためてお礼申し上げます。

社会人大学院の授業があったので、冒頭の田中総長の挨拶を聞いていないのですけれども、金山さんから聞くところによると法政大学として、何らかの形でミュージアムをつくるということ、この場で言われたということで、私も非常にうれしく思っています。

段木先生と私は法政大学に同じ年に着任をして、段木先生の後任として金山さんがいらして、その頃からずっと、「法政大学に博物館がほしいね」という話をして。段木先生のお話にもあったのだろうと思いますが、今のポアソナード・タワーが造られたときに、14階に非常にかわいらしい「博物館展示室」が作られました。ほんの狭いところですが、セキュリティがちゃんとあるガラスケースの展示で、しかも免震構造でできたのが2000年のことでした。

それ以来、私も含めて段木さんや金山さんと一緒に、法政大学の中で能楽研究所や大原社会問題研究所などの所長さんたち、各学部長と相談しながら、ようやくこの4月から田中総長になって、本日の田中総長の挨拶につながったと、思っています。ミュージアムを造るというのは、田中総長の選挙のときの公約でもありました。段木先生と私の法政着任から数えると今年が27年目なので、「やっと」「道遠し」という感じですが、それでも変化の兆しは現れた、と思っています。そして、こういうタイミングで、学芸員課程50周年、資格課程50周年のシンポジウムが開かれたことを、大変うれしく思っています。

私は、学芸員課程の必修科目の「生涯学習入門」という授業を担当していて、私の授業に出ている学生もこの会場にいますが、そういう点から、一、二、感想を申し上げます。

ここにいるスタッフの人たちも一生懸命努力し

て、先ほど言った展示室で、いま、谷川徹三展という小さな展示をやっています。この展示は、ここ数年、法政大学と資格課程が共催してきたものですが、「法政大学野球部」から始まって、大内兵衛総長、そして野上豊一郎、弥生子さん夫妻、そして谷川徹三さんとやってきました。息子さんの、谷川俊太郎さんが軽井沢の「法政村」という別荘地で、野上夫妻とともに映っている写真もあります。この展示を、ささやかながら私もお手伝いをしてきて思うことは、「法政大学は文化的、歴史的な資産運用が非常に下手」という所から少し脱却し始めたかな？ということ。 「法政大学は、なかなか良いところあるよね」という雰囲気は少しずつ出てきているのではないかな？と感じています。自分のいる大学、自分の卒業した大学にしっかりと誇りを持てるように、学生も院生も教職員、卒業生もなっていく、大学の場合、それが博物館の展示の役割の1つではないか、と思います。学芸員養成もそこをしっかり繋がっていくことが大事なかな？と感じます。

私は、日本の農村の学習・文化活動の歴史についての実証的な研究を、自分の専門の1つとして手掛けてきましたが、地方に行くと地方の資料が図書館や地下の倉庫に荒縄で縛られて、ポーンとほこりだらけというのがまだまだあつたりします。今から20、30年前は農村に行くと、家の建て替えが進んでいて、「この間までそれはあつたけど、処分しちゃったよ」ということに、たくさん出会いました。

先ほども、次にカリキュラムが増えるとしたら、地域づくりとの関係とか、非常にローカルなところと国際性とのつながり、という話がありました。それはきっと地域が持っているいろいろな物語、歴史が掘り起こされていって、そこに学芸員のニーズも増えていくのかな？と思いながら聞いていました。例えば、いま日本の干し柿のトップブランドは、長野県の下伊那の「市田柿」かと思いますが、私は20代のころにこの市田柿に携わった唐沢弥兵衛さんという人のインタビューをしたことがあって、この市田柿について本格的に勉強したいと思っていましたが、最近では地元でも研究が随分と進んでいる

ようです。そういう地域の物語が掘り起こされて共有されていくところに、博物館と図書館と公民館とが役割分担をしながら複合している「ミュージアム兼ライブラリー兼地域研究センター」のような施設が作られる。そこに、学芸員や司書、社会教育主事そしてそれらをつないでいく「地域学習支援士」「地域学習コーディネーター」のような資格が上級資格として生まれてくるのではないかと考えています。例が適切かどうかわかりませんが、看護師と助産師、保健師などとの関係道解イメージです。

これは私の考えですけれども、何が大事かというところから出てきた、技、技能と技術の両方を含む技、知識と智慧を現物の保存や文字を含む様々な媒体で記録して行くことではないか？と、同時に、現代の状況に合わせて、技と知識と智慧を創り出して共有することではないか？簡単に言えば、現場で作られた文化を整理共有し、現場から文化をつくっていくことが一番大事ではないか？そうしたら、少しずつでも、博物館や学芸員の需要も拡大していくのではないか？そんなふうに思います。

フィンランドの第二の都市、タンペレという町は、工業化が早く進み、労働運動も盛んだったところですが、そのタンペレにムーミン博物館があります。市立図書館の半地下階がムーミン・ミュージアムになっていて、トーベ・ヤンソンが描いた原画がたくさんあります。私は、ここに3回言っているのですが、3回目に考えてみました。「何でぼくはここに来るのだろうか？」と。答えは、「状況に流されがちになる自分に歯止めをかけてくれる場かな？」ということでした。作者のトーベ・ヤンソンはナチスやスターリンのフィンランド占領へのレジスタンスにも参加していたようですが、ムーミン一家も、

迎合しないのですよね。クリスマスでも松葉を食べて冬眠しちゃうし、身近なところに安らぎや冒険や楽しみを見つけることができる。「そういうことを感じに、ムーミン博物館に来るのかな？」と、ムーミン博物館で座りながら考えていました。そして、帝政ロシアの植民地だったフィンランドの独立を約束し実行したレーニンがスターリンと初めて会ったという建物の1フロアにある「レーニン博物館」は同じ通りに面して、100m程度の距離にあります。

いま、レーニン博物館の入場者はあまり多くないようですが、ムーミン博物館にはたくさん人が来る。日本人もとても多い。日本の中にもローカルなところに、たくさん良いものがある。その中に発掘され共有されているものもあり、ユネスコ文化遺産のようなものもあるけれども、先ほどの市田柿のように、現在の進行中というか発展中というものもたくさんあるんじゃないか。それをしっかりと私たちが楽しめるようになっていけば、きっと博物館や学芸員の需要も増えていくのではないか。そういう展開の中で、鷹野先生がおっしゃるように、きっちり現場で資料を扱える人間は大事であり、國學院でされているように、きっちりとした知識、見識もある人が求められ、育てていくのかな？そんなことを思いながら、皆さんの話の一部を伺っていました。

法政大学の学芸員課程と資格課程の50周年という2014年に、法政大学でも何らかの形でミュージアムができるという方針が示されましたが、これを1つの追い風にして、さらに発展していくと思います。今後とも皆さまのお力添えをいただきたく、お願い申し上げます。これもちまして、閉会の挨拶とさせていただきます。きょうはどうもありがとうございました。